

ワルシャワ大学の日本語教育史

岡崎恒夫*

(1) はじめに

来年(2016年11月)ワルシャワ大学は創立200周年を迎える。そして2019年にはワルシャワ大学で日本語教育が始まって100周年を迎え、ワルシャワ大学日本学科のわれわれにとってここ数年は記念すべき時期に当たる。

そこで、表題の通り、ワルシャワ大学における「日本語教育史」をはじめめるに当たり、先ず日本語講座開講当時の事情を紹介し、100年後の現代に至る日本語教育の変遷とその周辺について簡略に述べてみたい。

(2) 日本語講座開講

それはドイツのライプツィヒ大学を卒業したボグダン・リヒテル(1891-1980)がワルシャワ大学極東文化学科に日本語講座を開設したことに始まる。彼は1935年来日するまでラジオなどを通して日本紹介に努め、「日本列島」や「日本文学」などの著書を世に出した。リヒテルの弟子のカミル・ゼイフリッドはリヒテル亡き後日本関係の文献収集家として活躍した。

その後日本語教育で重要な役割を果たしたのがチェスワフ・ミシキエヴィッチとミエチスワフ・ミシキエヴィッチの兄弟である。当時ワルシャワに住んでいた日本人から日本語を習い、チェスワフが1926年に「ポーランド・日本協会」で日本語

を教え始めた。ついで1928年に弟のミエチスワフがワルシャワ大学東洋学部付属東洋専門学校で日本語講座を設けた。それに協力したのがポーランドの歴史と文化の研究目的で留学していた梅田良忠で、ポーランドにおける日本語教育はこのミシキエヴィッチ兄弟と梅田良忠に負うところが大きい。

彼らの下で日本語を学んだ人の中にヤン・ヤボルスキとピョートル・ヤブウォンスキがいた。二人は1933年ワルシャワ大学に中国学科を開設し、ヤボルスキ助教授が主任で、ヤブウォンスキが助手として中国語のほか日本語も教えた。

1935年にはワルシャワ大学ではヤン・ミシガ、クラクフのヤギェウオ大学ではデンツェル・カールが日本語を教えた。同じ頃日本・ポーランド交換留学生としてポーランドに滞在していたスラブ言語の研究家守屋ひさしは1938年から「エホ・ダレキエゴ・フスホドゥ」誌に日本語文法講座を掲載し始めた。

1939年9月1日にドイツナチス軍がポーランドに侵攻し、第2次世界大戦が勃発した。その後6年間にわたり続いた大戦のためポーランドは600万人を超える犠牲者を出し、1945年にやっとその大戦も終結した。戦後ポーランド各地の大学が活動を開始すると同時に日本語教育活動も再開された。1955年ワルシャワ大学中国学科に日本学科が正式に併設され、初代学科長にヤブウォンスキ教授が就任した。次にピエスワフ・コタンスキ教授が主任になる前にしばらくヤヌシ・フミエレフスキ教授が主任を務めた。その頃は日本学科

*ワルシャワ大学上級講師

としての募集がなく、中国学科生として採用された学生の中で特に日本に興味を持つ学生が日本学を専攻した。日本学関係の学術論文は「Rocznik Orientalistyczny」や「Przegląd Orientalistyczny」に掲載された。

(3) 日本語学習の背景

地理的にも歴史的にも遠く離れているポーランドでなぜこれほどまでに日本文化を研究し、日本語が学ばれていたか。(第2次世界大戦前後の日本で一体だれがポーランド文化に興味を持ち、ポーランド語を学ぼうとしたか、想像していただきたい。皆無に近かったらうことは想像に難くない) それにはいくつかの理由が挙げられる。一つは日露戦争である。この戦争を機にポーランド人の間で日本への関心が大いに高まった。ポーランド人が、当時ポーランドを支配していた強国帝政ロシアを極東の、それも近代化が始まって間もない小さな「日本」が打ち破った事実に驚嘆し、狂喜したことが日本への関心につながり、いわば祖国再興のモデルと考えた節がある。

次に第2次世界大戦開戦直後にポーランドやリトワニアから逃れてきたユダヤ人に、本省の許可が下りなかったにもかかわらずビザを発行し、7千人以上の人を絶滅の危機から逃れさせた杉原千畝の存在がある。枢軸国たるドイツや本国日本の厳罰を恐れず、彼が取った人道的処置と勇気がポーランド人の心を捉えたことが、ポーランド人の親日の底流にあることは間違いなからう。他にいくつかあるが、本題を離れるので割愛したい。

(4) 1970年以後

筆者がワルシャワ大学に奉職した1970年代初め頃からの日本語教育事情を記すことで当時共産主義政権下にあった中央ヨーロッパの小国でどのように日本語が教えられ、学ばれたかの一端を紹

介できれば幸いである。

まず教科書がなかった。それどころか、教科書として使えるような日本の活字を書いた書籍が皆無で、授業は板書から始めた。学生はそれを書き写すことでやっと、自分用の学習教材が持てたわけだ。辞書は、英和、和英、漢英辞典が全員に2セットしかなく、予習復習は日本学科に残ってその数少ない辞書を使い回しするほかなかった。テープレコーダーとか和文タイプライターのようなものもなく、補助教材を作るにも、その手段がないという始末だった。最も大変だったのは試験作成で複数の学生のためにカーボン紙を数枚重ねて、手書きするわけだが、いくら力を入れても下の方はかすれて見えにくくなるため、何回かに分けて書く手間も体力も相当なものだった。若かったからできたようなものの、今ではとても無理だと思ったりする。

「ガリ版」という言葉をご存じだろうか。今となってはそんな言葉を知っている人はほとんどいないのではないだろうか。油をしみこませた薄い紙をがりがりの鉄板の上に載せ、鉄筆という、先が微小な鉄の玉になっている(千枚通しの先を折ったような)もので書くわけだが、それ一枚を書けば、輪転機にかけて数十枚が刷れる仕組みになっている。薄い油紙を破らずに書くのが至難の業で、それを専門にする職業が成り立つほど難しい技術だった。それから印刷技術はだんだん向上していったが、ポーランドでコピー機が自由につかえるようになったのは1989年に入ってからだった。なぜこのように印刷機械が使えなかったかお解りだろうか。それは一種の思想統制で、いわゆる反政府的な印刷物などを取り締まることと、同義だった。これはポーランドに限ったことではなく、他の社会主義国や専制的な政治が行われている国では、このようにして言論の自由を封じ込めたのである。語学学校で外国語を学んだりするようなごく当たり前のことが、体制が違ったり、強権がはびこったりすると、できなくなるのだ。

筆者も日本語を教えることで、こんな困難に直面して初めて自由に語学を教え、学べるのがどんなに貴重で大事なことであるかをつくづく思ったものだ。日本語教育とその国の平和との関係を考えて、それは日本語教育に止まらず、教育全体の意味を問い詰められていることになる。こんなことでも世界の平和とつながっていることの意味をしっかりと考えて欲しい。

(5) 日本語学習の動機

日文学科の学生の日本語学習目的は、共産主義時代から資本主義時代へ変わった時点で大きく変化した。共産主義時代には、日本からの進出企業も少なく、日本語を習得してそれで生計を立てることが大変困難だったからだ。ではなぜ常に10倍以上の競争率の中を苦勞して日文学科に入ろうとしたのだろうか。当時新しく入学してきた学生にその理由を尋ねると、「子供の頃読んだ日本の童話の世界に惹きこまれたことが発端だった」とか「ベネチア国際映画祭でグランプリ金獅子賞を受けた映画『羅生門』を見て、衝撃を受け、あのような映画を作る国民の事を知りたいと思ったのがきっかけになった」とか「祖父から日露戦争時代の日本の話を何度も聞かされ、その国に憧れを持つようになったことがきっかけだ」と言った答えが返ってきた。これからわかるように、その頃の日本語学習の目的は極めてロマンの色濃いもので、学習が将来生計を立てるのに役立つとか言うような打算は、持とうとしても持てない時代だったわけだ。

それが1989年にベルリンの壁が崩壊し、ポーランドが資本主義に移行した時点で、だいぶ変わり始めた。日本企業がどっと押し寄せ、通訳や翻訳の仕事が増えるとともにポーランド人で日本語のできる人材が急に必要になってきたからである。ということは、日本語を学習すれば、将来役に立つと言う打算が働き始めたということでもある。

また、日本から大量に入ってきたマンガやアニメの影響も大きい。近年入学してくる学生のかなりの数は、子供の頃なじんだマンガやアニメが日本に興味を持つ発端になったことは、彼ら自身が認めている。

留学の可能性が増えたことも日本語教育の大きな転機となった。1960年代は5年に一人と言う割合でしか留学できなかったが、民主化後はその数が一気に増え、毎年誰か行けるようになり、今や日文学科に入学した学生は、修士課程を終わるまで(5年間)ほとんどの学生が何らかの形で留学できるようになった。それは文科省の奨学金だったり、国際交流基金の日研究生制度だったり、大学間協定枠の交換留学であったりと、毎年10数人が留学できるようになったことの意義は大きい。これこそ筆者が日文学科で教え始めた頃の夢で、日本に興味のある学生は全員留学させ、直に日本文化に触れさせたり、日本人との直接の会話で日本語能力を高めさせたりという思いがほぼ叶ったといえるかもしれない。

(6) 現在の日文学科

近年日文学科の志望者はかなり高止まりで安定している。毎年競争率が30倍前後で、ワルシャワ大学の中では極めて厳しい難関である。入ってくる学生は「マトゥーラ」と呼ばれる高校卒業時に全国一斉に行われ、大学入学資格証明にもなる試験の結果を参考にして選ばれる。全日制の学生を20名ほど採用し、残りは夜間教育の学生を40名ほど入れている。全日制の場合、授業料は無料だが、夜間の場合は年間の授業料を納めなければならない。(ポーランドの国立大学は全日制学生に関しては学費が一切かからないと言うことだ)このところ、毎年70名ほどの新入生が入ってくるが、1年後には3割近くの学生が進学できない。なぜこんなに多くの学生が進学できないかと言うと、年間で一つでも単位を落とすと放校になるか

らだ。もう一度入りなおそうと思ったら、再度30倍の難関を突破しないとイケない。

教材は東京外国語大学の「日本語」シリーズを中心として使い、それに各教官が自己作成した補助教材を当てることが多い。基本教材として「日本語」を使い、文法、表記、漢字、作文などが別個の科目として設けてあるので、基本教材に沿って教官が教えるという方法を採用している。漢字教育については、自前の教科書4巻を使って、毎週新出漢字20字を教えている。2年生の初めからは古文と漢文を教える。EUの教育制度により、入学後3年目に学士論文を書いて、それで卒業してもよし、次の修士課程（2年制）に進むこともできるが、それには一定の基準点を上回る必要がある。他大学からの進学もあるがいろいろ問題もあるようだ。卒業後の進路は前記の通り、在ポーランドの日本企業に勤めたり、留学後そのまま日本に残って仕事を見つかったり、博士号を取ったあとに外国の日本学科に勤めたり、国際関係の専門を修得した後外務省に入って外交官になったりする。今在ワルシャワ日本大使館でも多数の卒業生が働いている。

(7) 外国語を学習するということ

国によってそれぞれ使う言語が違うと言うことは、他国人との交流を望めば、当然その国の言語を学ぶしかない。（あるいは学んでもらうか）それを何とか簡単に解決する方法はないかと、考えたのがポーランド出身のザメンホフと言う眼科医だった。彼は異なる言葉を話す人の中で摩擦が起きやすく、言語の違いが人間を敵味方に分ける原因になりうることに気が付いた。この摩擦を改善するために国際補助語たる共通言語があればいいと思いつきエスペラントを考案した。しかしそのエスペラントも、若干の支持者が世界にいるけれど世界共通語にはなりえなかった。それはなぜか。人と人との関係で最も大事なことは心と心とのつ

ながりだからだ。いくら同じ言語をしゃべっても、通じ合えない人はいるものだ。それは言語の後にある心に通じていないからに他ならない。実は外国語学習で一番気配りをしなければならないのは、表面的な言語現象（文法とか語彙とか）も大事だが、その心のつながりではないだろうか。日本語を教える事を通して、教える人間と教えられる人間との相互関係の中で成り立つ心の共鳴とも言うべき要素が大切なような気がする。

とは言え、今ヨーロッパではシリア人、リビア人、アフガニスタン人が難民としてたくさん押し寄せている。彼らは必要な移住先の言葉を一日も速く話せるようになることで、現地の生活に溶け込んでいけるというものだ。またこの難民たちを受け入れる側の国も彼らの言語を理解する人材を育てる必要が出てきている。このような場合、できるだけ短い時間で実践に役立つ言語教育を施すことが重要になってくる。従来の外国語教育がどこまで通じるか。

【Ⅱ】 カードシステムの効能（授業進行の技術として）

皆さんは授業をどのように進めているだろうか。私がワルシャワ大学日本学科で長年採って来たカードシステムを紹介したい。すでにやっておられる向きがあったら、それはそれでいろいろ意見を交換できるので参考にさせていただきたい。

これは長年の友人だった言語学者千野栄一氏から直接伝授された技術で、私は非常に高く評価しているうえに実際学生の学習に大いに役立っていることから、ぜひご披露したい。

皆さんは授業を進行させる際、どのように学生に答えさせたらいいか迷った経験はないだろうか。名簿の名前を上から順番に当てるか、一人おきに当てるか、アトランダムに当てるかで苦労した経験はないだろうか。そんな学習上の問題について千野氏とはなしたとき、彼がカードを使ったらと

示唆してくれた。それは千野氏の古代スラブ語の先生に当たるヨゼフ・クルツ教授からの受け売りだった。

方法は極めて簡単で、名簿の代わりに各学生の氏名を書いたカードを準備し、それにいろいろな情報を書き込んでいくやりかただ。授業の始めによくカードを切り、裏返しにおいて、それをめくりながら順番に当てていくわけだ。そうすると次のカードが誰のかわからないため、学生は不断の注意を強いられることになる。ある学生に答えさせて、何か問題に引っかかったら、それをカードに書き込んで次の授業で解決できたかどうか確かめる。カードが一回りすると、もう一度カードをよく切り、学生たちに自分の順番を予測させないようにする。それと問題の難易によって学生の能力を差別することなく、公平に当てられるので、先生が操作をしているような印象が全くない。筆者はそのカードに学生の趣味や出身地、生年月日、特徴などを書き込んで答えさせるときに臨機応変な対応を取るようになっている。そうすることによって学生たちは親近感とともに緊張感をも継続維持できることになる。筆者の手元に学生（マルタ・ゴロンカ）の協力を得て採集したアンケートの結果があるので、ご希望の向きはご連絡いただければ送付する予定。

このカードシステムは功を奏したか。昨年の日研究生試験でポーランドの学生の平均点が中国を抜いて一位になったというニュースを大使館から受けたから、かなり有効な技術だといえるのではないか。

[了]

[参考文献一覧]

- 1 ヴィエスワフ・コタンスキ、カミル・ゼイフリッド「ポーランドと日本の文化交流」第38巻2号国立学術出版社、1961
- 2 ヴィエスワフ・コタンスキ、「ポーランドでの日本語研究」『言語生活』第84巻9号、筑摩書房、1958

- 3 ヴィエスワフ・コタンスキ、「ワルシャワ大学における日本研究」『言語生活』367号筑摩書房、1982
- 4 クリスティナ・岡崎「ポーランドにおける日本研究」『国際文化会館会報』26号、国際文化会館、1971
- 5 岡崎恒夫「ワルシャワ大学における日本語教育事情」『日本語学』第8巻12月号明治書院、1989